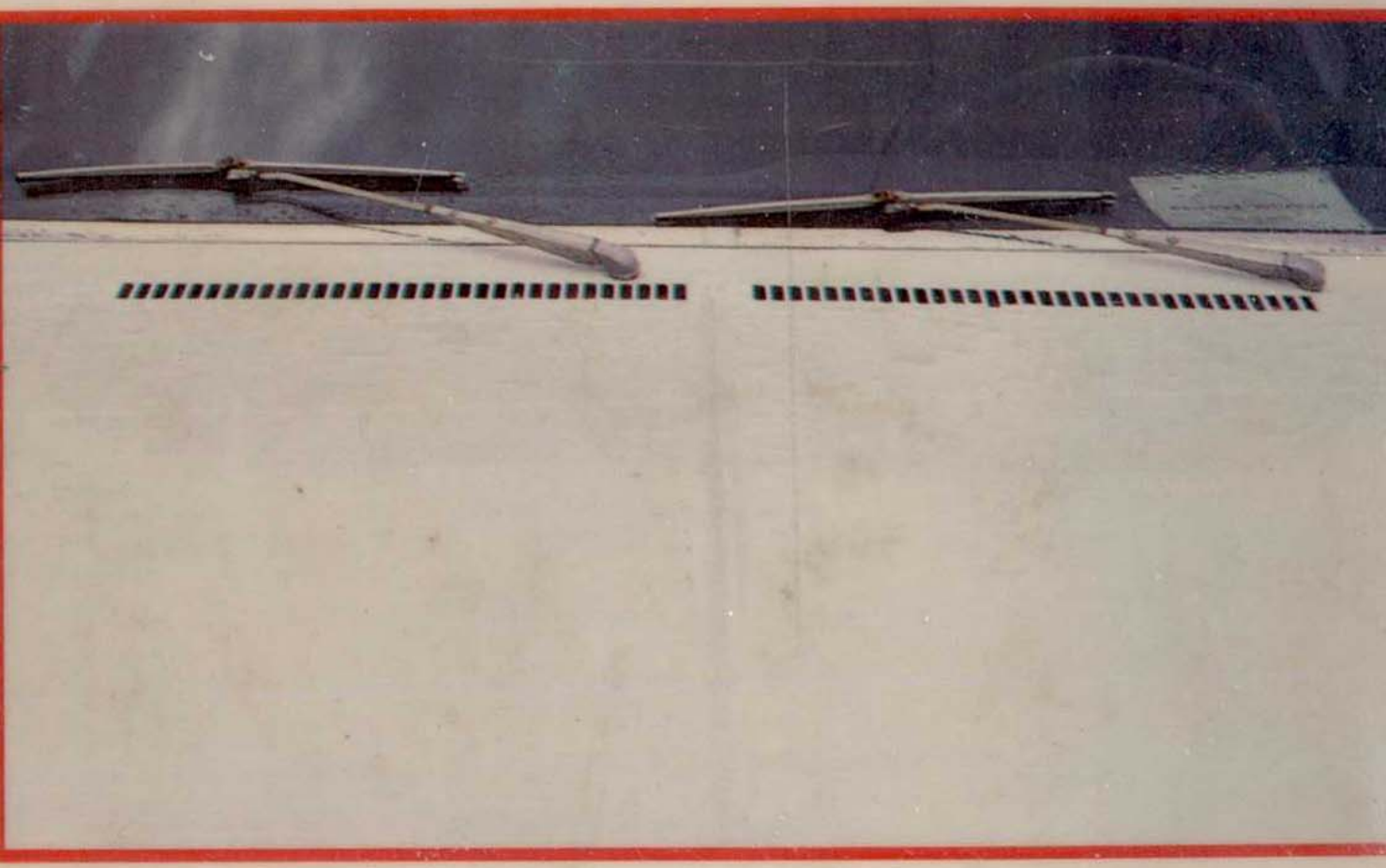
片岡義男

and I Love Her



and I Love Her

片岡義男（かたおかよしお）

角川文庫 5063

昭和五十七年一月十日　初版発行
昭和五十八年七月三十日　十二版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-137126-0946 (0)

and I Love Her

義男

角川文庫 5063

1

化粧室のドアを内側に開き、彼女は廊下に出てきた。

シャワーを浴びたあとの湯滴をタオルでぬぐったばかりの体に、ショーツとハイヒール・サンダルだけを、はいていた。

ショーツは、きれいな光沢のある、淡い草色だ。細く美しいヒールのある、すっきりとしたサンダルの色が、よく調和していた。ひと月まえに買った、春物のサンダルだ。

そろそろこのサンダルの季節ではないかと思い、シャワーを浴びたあと化粧室ではいてみた。

カーペットの敷きつめてある長い廊下を、彼女は奥にむかって歩いた。廊下の左側にはクロゼットのドアがいくつも規則的にならび、右側は化粧室のドア、そ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

してキチンのドアとつづく。
内側へ半開きになっていたキチンのドアをさらに大きく開き、彼女は広いキチンに入った。キチンには、明かるくライトが灯っていた。
突き当たりの壁のくぼみにはめこまれたように置いてある、丈の高い、大きな冷蔵庫まで、彼女は歩いた。
輝きのある全身の肌は、うっすらとクリーム色をおびているように見える。バランスのとれたしっかりした骨格を、しなやかな筋肉が支えている。
ひきしまった脚をまっすぐにのばして歩くとき、なめらかな腰の回転が、全身の動きの最も重要な中心となった。体ぜんたいの量感にくらべてやや小さい胸のふくらみが、気持よくリズムを保って動いた。
アヴォカード色の冷蔵庫のドアを、彼女は開いた。
上体を軽くかがめ、中ほどの段から、罐入りのビールを一本、とり出した。
彼女は、冷蔵庫の前を離れた。冷蔵庫のドアは、自らの重みによって、自動的に閉じた。
食器棚から、グラスをひとつ、彼女は出した。丈の高い、円錐を逆さに立てたかたちのグラスだ。

丸い白木のテーブルにグラスを置き、12オンスの罐ビールのプル・リングを、指さきでおこした。リングに指をかけ、引き抜いた。

ビールを、彼女は、グラスに注いだ。12オンスの罐ひとつで、グラスはちょうどいっぱいになった。

罐をテーブルに置き、三角形にあいている注ぎ口から、リングを罐のなかに落とした。

冷たいビールの入ったグラスを、彼女は右手で持った。グラスを唇へはこび、ビールを飲んだ。

軽い味が冷たさといっしょに口のなかで広がり、食道をくだっていった。その心地良さを、彼女は、楽しんだ。

グラスを持ったまま、テーブルからキチンのドアへ歩き、廊下へ出た。廊下をさらに右の奥へいくと、居間の入口だ。

彼女は、居間に入った。

余計な家具や調度のなにもない、すっきりとした、二十畳の空間だ。バルコニーに面したガラス戸と、となりの寝室の壁とがつくる角に、フロア・スタンドが、灯っていた。居間ぜんたいが、ほんのりと明かるかった。

反対側の壁の隅に、回転式の簡単な台に乗せて、21インチのＴＶがあった。居間に入ってきた彼女は、そのＴＶへ歩いた。

電源スイッチを指さきで押しこんでから、バルコニーに面したガラス戸の手前にある、小さなテーブルまで歩いた。椅子をＴＶにむけて置きなおし、彼女は腰を降ろした。

グラスを持った右手のひじをテーブルに軽く置き、ハイヒール・サンダルをはいた両足を開きぎみに、背をまっすぐにのばした。

ビールを、彼女は飲んだ。

ＴＶのスクリーンに画像が浮んできた。男のニュース・キャスターの顔が映り、彼の声が聞えた。今夜はこれで最後のニュースの、いちばんおしまいの部分だった。

ニュースが終ると、画面は天気予報になった。

はじめに、今日のお天気の、おさらいがあった。

可愛らしい顔立ちをした若い女性が出てきて、次のように言った。

「あと二日で、ひな祭りなのですが、今朝早くの関東地方は、春の淡雪で白く薄化粧をしました」

東京近郊の住宅地を上空からとらえたヘリコプター・ショットが、画面にうつった。軒を触れあうようにしてならんでいるたくさんの民家の屋根が淡雪でうっすらと白く、道路が黒かった。

この雪は、八丈島の南海上を低気圧が通過したせいだという。この低気圧のため、関東から西の太平洋岸は、雨あるいは雪になった。

雨や雪をもたらした低気圧が去ったあとへ、大陸から移動性の高気圧が張り出してきた。そのため、雨や雪は朝の早い時間で終ってしまい、穏やかな晴天の日となった。

この説明どおりの天気図が、TVの画面に映った。

明日は高気圧が東北地方をとおり、東へ進んでいく。このため午前中は晴天のままだが、次第に雲が多くなり、明後日は一時的に雨になるかもしれない。画面のなかの可愛い彼女は、そう言った。

三月ぜんたいの予報が、それにつづいた。

記録的な寒さのつづいた冬に、さらにもういちど念を押すかのように到来していた寒波が明けると、一転して暖かい春がくる。それが、三月ぜんたいの予報だという。三月は、寒の戻りをおえると、全国的に気温があがり、晴天の日がつづ

きそうだ。

手に持ったグラスのなかの、冷たいビールを飲みながら、彼女は、ＴＶのスクリーンを見た。

必要にして充分なだけのウエーブのある、ながめの髪を、左手で額から頭のてっぺんにむけて、何度もかきあげた。

天気予報ぜんたいがひととおり終ると、それにつづくかたちで、桜の開花予想について、画面は語っていった。

気象庁の産業気象課に首都圏の各地から届いたソメイヨシノの切り枝が、画面いっぱいにクローズアップになった。切り枝には、桜のつぼみが、たくさんついていた。

予報官の姿が、画面に登場した。枝についているつぼみに関して、彼は説明した。

このつぼみは、まえの年に桜の花が散ってからひと月ほどあと、すでにその枝に出来ていたものだという。越冬芽と呼ばれていて、秋が終るまではさほど成長せずにいるが、冬の寒さをくぐり抜け、春が近づいてきて気温が上昇するにつれ、つぼみは大きくふくらみはじめる。

大きくなってきたこのつぼみの重さを頼りに、予報官は、全国各地での桜の開花日を予想する。

予報官の指が、枝からつぼみをつまみとっていく。秤(はかり)に乗せ、重さをはかる。何本かの枝からつまみとったつぼみ一〇個の、重さの平均をとっていく。

つぼみ一〇個の重さが一グラムに達しているなら、そのつぼみのついている枝をとってきた場所の桜は、いちおうの目安として、一〇日後に開花する。

ＴＶの画面は、屋外のショットにきりかわった。桜の木が、うつった。つぼみをいっぱいにたたえた、桜の木だ。

つぼみの様子によって桜の花がいつ咲くかを予想する方法は、室町時代の貴族たちが、花見連歌のためにすでにはじめていた。という説明が女性アナウンサーの声で入り、桜の木は画面の奥へ、遠くズーム・アウトしていった。

番組は、終った。

椅子を立った彼女は居間の隅にあるＴＶまで歩き、電源スイッチをオフにした。画面は、暗くなった。

ＴＶの前に立ってグラスのビールを飲みほした彼女は、からになったグラスを持ち、居間を出た。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

廊下からキチンに入り、奥の冷蔵庫にむかった。冷蔵庫のドアを開き、さきほどとおなじように罐入りのビールを一本、とり出した。

白木のテーブルまで歩いてそのうえにグラスを置き、罐のプル・リングを引き抜いた。罐のなかのビールを、静かに、グラスに注いだ。注ぎおえると、プル・リングを罐のなかに落とした。

冷たいビールをいっぱいにたたえたグラスを右手に持ち、彼女はキチンのドアへ歩いた。外の廊下へ出た。化粧室へ歩き、なかに入った。

左側には、大きな洗面台、そして、そのむこうに、トイレット・ボウルがある。右側は壁になっていて、その壁のまんなかに、幅の広い縦長の、大きな鏡が、姿見として、とりつけてあった。

彼女は、その鏡の前に、脚を開いて、立った。ショーツ一枚に春のハイヒール・サンダルだけの自分の姿を、彼女は鏡のなかに見た。

見ながら、グラスのなかのビールを飲んだ。

彼女の視線は、ハイヒール・サンダルまで、ゆっくり、くだっていった。鏡と正面からむきあったポーズのまま、そのサンダルが自分の雰囲気(ふんいき)に合っているかどうか、点検した。

彼女は、横をむいた。サンダルをはいた足を、横から見た。グラスのビールを飲み、片足をうしろへ軽く蹴りあげてみた。

鏡に、彼女は背をむけた。サンダルを、ふりむいてうしろから見た。自分自身との雰囲気の調和、そしてぜんたいのバランスやはき心地、重心のかかりぐあいなど、そのサンダルはすべて完璧だった。

グラスからビールを飲む彼女のうしろ姿が、鏡にうつっていた。

2

林のある大きな公園の、南側の歩道を、彼女はひとりで歩いてきた。並木のある歩道だ。

昨日は、寒かった。だが、今日は、あたたかな南風が吹いている。風は、すこし強い。歩いてくる彼女の髪を、その風は、肩さきからうなじへ、気持よくなび

かせた。

彼女は、スーツを着ていた。春さきのこの季節にぴったりの生地と色だ。なんらためらうことなくきわめて簡素なラインが出るように仕立てたそのスーツは、もし今日のように風の吹いていない日だったら、完璧すぎて近よりがたい印象を、彼女ぜんたいにつくりだしたにちがいない。

だが、今日は、風が吹いている。しかも、あたたかい南風だ。

その風に、彼女の髪があおられる。シャツのえりが、喉もとでごく淡いクリーム色に、小さくはためく。そのことが、いまの彼女の完璧なスーツ姿にとっての、安全弁のようなすきまになっていた。

風に目を細くし、信号のある横断歩道まで、彼女は歩いてきた。そして、横断歩道で、立ちどまった。

往復八車線の、いつも自動車の流れの絶えないこの道路を、公園とは反対側へ彼女は横切るのだ。横断する歩行者のための信号は、赤だった。

ひとりでそこに立ち、彼女は信号が変わるのを待った。南風が、彼女の髪を、ひっきりなしに、肩からうなじへあおった。

クラッチ・バッグと、四つにたたんだ分厚い英語の新聞を、彼女は右手でわき

の下にかかえるように持っていた。左手に、持ちかえた。

信号が、グリーンに変わった。彼女は、横断歩道を渡っていった。途中で、三人の人とすれちがった。彼女がむこう側へ渡りきるまで、公園のほうから道路を横切っていくのは、彼女だけだった。彼女が渡りきってから、アタッシェ・ケースを持ったビジネスマンがひとり、急ぎ足で横断歩道を渡った。

むこう側に渡った彼女は、公園に沿った歩道を歩いていたときとおなじ方向へ、歩いていった。

しばらく歩くと、再び横断歩道だった。公園に沿った八車線の道路に、四車線の道路がT字交差するのだ。

ここでも、信号は、赤だった。信号が変わるのを、彼女はひとりでそこに立ち、待った。

やがて信号が変わり、彼女は四車線の道路を、むこうへ渡った。彼女の足もとから前方へまっすぐにのびている彼女の影が、彼女自身よりも二、三歩だけ早く、むこう側の歩道にあがった。

そこからすこし歩くと、二〇階に満たない高さのホテルが、歩道からかなりひっこんで、建っていた。

道路から半円形のカーブを描いて、車寄せが、そのホテルの建物の正面へ入っていく。その車寄せに沿って、人の歩くウオーク・ウエイがあった。ウオーク・ウエイを、彼女は歩いた。

回転ドアから、彼女は建物のなかに入った。広いロビーをまっすぐに歩いてむこうへ横切り、両側にエレベーターのならんでいるすこし幅のせばまった部分を抜け、コーヒー・ショップに入った。

軽く食事をすませることもできるコーヒー・ショップだ。軽食の人たちのための席とは別に、コーヒー・カウンターが、いっぽうの壁に沿ってまっすぐにあり、そのカウンターは、奥の壁に突き当たる手前で、半円形に外にむけてふくらんでいる。

その半円のむこう側の席まで、彼女は歩いた。彼女の、お好みの席だ。

低いストゥールにすわり、クラッチ・バッグは丈の低い背もたれと自分の腰とのあいだに、置いた。分厚い英語の新聞は、ステインレスのカウンターに乗せた。

制服を着た若いウエイターが、水の入ったグラスを彼女の前に置いてくれた。彼女は、コーヒーを注文した。

コーヒーは、すぐに来た。

四つにたたんであった英語の新聞を開いて左手に持ち、彼女はコーヒーを手もとに引きよせた。

コーヒーがすこしだけさめるのを待つあいだ、彼女は、開いた新聞の第一面をながめた。

『ホノルル・スター・ブレティン』という名前の新聞だ。ホノルルの、ウイーク・デーの朝刊だ。全部で一一〇ページあり、AからJまで、一〇のセクションに分かれている。今日、ホノルル経由で東京に来た人からもらったものだ。

題字の左端に、「本日の空模様」として、数行のごく簡単な天気予報がのっていた。彼女は、それを読んだ。この朝刊が出た日のオアフ島に吹く貿易風のスピードは、時速で一〇マイルから二〇マイルだと、彼女は知った。

第一面の見出しをざっと見てから、彼女は、二ページ目を開いた。となりのストゥールは空席だから大きく新聞を広げ、第二ページと第三ページとを同時に目の前に広げた。

ぜんたいを、彼女は見渡した。

三ページ目の左下に、天気予報が出ていた。昨日の最高気温と最低気温にはじまって、潮の満ち引きとかアメリカ本土の各地の気温など、こまかな数字がなら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com